

「クリストファー外科学」

〔監訳〕 石川 浩一・草 間 悟（東京大学）

旭川医科大学教授 水 戸 廻 郎

約十年前、私は米国での Research fellow の生活を終えて帰国し、間もなく外科学各論を担当することになった。私にとっては正に大任、新たなことに対する期待と不安といわれるが、不安を通りこし、空おそろしさすら感じた。そんな私を支えてくれた本が、“Christopher’s Textbook of Surgery” 第 8 版であった。幸い学部 3 年生の 70 % 以上がすでに書架に飾ってあることを知り、予定される講義の箇所を読んでくことを要求した。講義では各項毎の大略と補充的な説明を行ない、重要な文章の部に underline をひかせた。その上、視覚教育と称して Netter の画をカラースライドで投影解説し、自験例などをそえて責を果した。私には Christopher は救いの神であり、飯の糧ともなった。

なぜ Christopher を選んだか？それは今日の世界の外科をリードしている米国の外科医を、育てそはぐくむ書であったからである。留学時代、Conference で頭から爪先まで、正確な数値をあげて、まさにたて板に水式に討論に加わる学生、Resident を目の当りに見て、私の学生時代と比較し、驚異を感じた。その秘密のひとつは彼等が Harrison と Christopher を各章毎に分冊にして持ち歩き、その各頁が underline で読めないほどに染まって、その染まりが彼等の脳裏に焼きついていることであった。まさに Bible 的存在で

あった。ただし、不変の Bible とは異なり、本書は版を重ねる毎に章の追加、あるいは執筆者がその時代の top level の専門家となり、up-to-date の知見が加えられる。しかし奇をてらったものではなく、基調は臨床医にとって必須の解剖、生理、病態、治療について理論から実際までを簡明に記載していることである。いわゆる、外科総論の項も臨床に直結した記述が行なわれ、従来の教科書のように、理論だけの無味乾燥さがなく、誠にアメリカ的、pragmatical な教科書である。したがって、学生時代ばかりでなく、臨床医の座右の書として愛用されている所以もここにありと考えられる。かといって、日本人で本書の一頁から最終頁まで通読された方は稀であろう。その理由は英文であること、また時折り難解な文に出会うからであり、直接的に必要な部分以外は邦文の本で事をすませることによるのであろう。

Harrison の内科が邦訳され、当然のこのように Christopher も日本語でお目見えすることが予測され、また期待された。今回、石川教授の監修の下、先生の門下生の協力で、見事に我々の期待が実現した。

私の愛用した Davis の編集から Sabiston に変わり、原著は 600 頁増しの 2,000 頁を超え、コンピュータ・臓器移植、腫瘍免疫、小児外科、脳神経外科、心・脈管外科、そ

の他の項目も内容も一変し、外科学の急速な進歩と発展を如実に示す大冊となった。私が講義前に 20～30 頁の訳を試みた苦勞から推察すると日本語として出版することは想像を超える仕事である。単に、文法的な正確さによる訳は日本語となるとは限らない。加うるに専門的造詣の深さによる解釈が必要となる。

東大第 1 外科は頭から爪先まで幅広い臨床を行なってきた教室であり門下の専門家に分担訳を依頼したことは的を得たものといえる。監修者の努力によると思われるが、一般に英文の日本語訳は長文となるが、本書は原著より僅か 200 余頁の増加にとどめたことも驚きのひとつである。

本書を读了して感じたこと；全編を通じ見事な訳文が多いが、忠実に訳を試みた結果、日本人があまり使用しない受動形が多用されたり、難解な日本語の単語に遭遇すると、いかにも訳文といった感じを与えることもある。また執筆者の見解が 100 % 正しいことがありえないので、その箇所を訳注の型で訂正文を加えてあればより完全なものとなろう。さらに欲をいえば、軽装丁の小冊子に分割されるならば、持ち歩きに便利となり、まさに必携の書となるであろう。

いつでも、気軽に、また苦勞なしに現代の外科の知識を吸収しうる本書を手に行けることは恵まれた時代と世代を感じます。

辞書片手に一頁、一章を読んだ私のひがみ根性は“英文を訳する時間と苦勞からの解放、その余力を外科学臨床に、また、明日への外科と向けたい”と念じます。

B5 頁2448 図879 写真1273
原色図6 1975 年 ¥42,000 千800